十輻 一冊 一函
表 30 44

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44
ガラス使用

三十輻之卷

十三

辰
44
13

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

三十輻巻之十三

雑記

帝室博物館圖書之印

老の幸

右二品

契沖法師

阿倍照任

坂昌周

十萬人の輯

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

三十輻考 乙十三

雜記

一 志ゐ志ゐ（しゐ）ともに日本記ふみ（ぶみ）ともいふ歌（うた）ぞおほかる
哥ふみ（ぶみ）ともいふ
庶（こひねがは）くは日本記（にほんぎ）等（とう）四ふみ（ぶみ）ともに
一 いれてうたひいるる活（いき）ながらにいるつかの美名（びめい）
つまものこよあそ
一 かけろふ（かげろふ）ともかぎろひ（ひ）ともいふ
そもゝ虫（むし）とのみよあそ
一 いらはち 又（また）なるみといふ（ふ）くさいるるをおそ
おそ（ろ）しくきたなく言（いひ）そこひ（ひ）なす
一 あめそら はるのそら はるのそら
一 なそしたふ万葉（まんえふ）よいとおなしともに哥（うた）ぞ
一 はるこゝろおなす 和名（わみやう）よ鶯（うぐひす）の下（した）よ
こゝろなれとも哥（うた）よ油（あぶら）なり
鶯のこゝろ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44
ガラス使用

一 ㇰ ㇰ ㇰ

世よ記ことといつゝふへ侍ゝり

一こけと こゝろけといふことをるゝをこれいふよ
ほけなもいふ（ほかな）ことも 万葉よゝくゝり

一そゝろあををほをといふ 和名よゝくゝり
よゝんゝを

一まさこ いさこまれこゝにはあゝ
るゝ 万葉にもあゝくまなこととゝをゝ
まれによゝを

一ゝをとをかゝとゝふほまを日本記よゝくゝ
かゝゝらふ ゝをゝふ侍ゝをとこれ妙
いそいちのまれ 万葉にもいゝをよ
ゝにんのゝゝをよ

一大日要尊 ゝ妙八日を記ゝよゝものは日
夜をよゝまゝよゝふこゝ ゝよゝくゝ
万葉に和夜をよひゝよゝもゝ記ゝまゝよれ

一伝の字も
てふにそゝよゝ侍ゝ

一ゝをゝ やうし かゝゝゝをゝ ゝさゝふ
ゝゝをなゝゝよゝ記ゝよゝ

一かゝゝよ おゝゝ 田ゝ心ゝう

一まに まふ 万まよ ゝさゝにゝをしゝくゝ

一いとはと ゝはとおゝゝ 心れゝを 仙云ま
こゝゝをのひまゝをゝゝをゝ こゝゝのいとはとよ
いゝゝらし

一萬葉に
玉門のそれはみゝもゝ 百千ゝをちゝふくれと君かなね
おれはお田くの ゝ秋 百千ゝをとよゝめゝ
ゝゝの玉名といゝる説あり 修道法師の林葉集よ
梅の花ゝゝゝゝゝ百千ゝる作のゝゝ
拾遺集草よ 建久六年正月 叙信よ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 こゝろ山と云も深山よりもあり 又こゝろの山あり

一 類聚国史ニ 大堀山と有 野を今の岩山ならん

一 賀茂社山を又小神山ともいふ 万葉にも神山とよめる歌あり 又いろ〳〵神山 相撲ヶ神山 箱根よりそこたてまでの内にも多し 皆深山の事なるべし

一 さけを こゝきと云 世もは 神よ 幸ある事をいのりそれをは和名は 神酒とうさして こゝといふ

一 かはみ こもの名 六帖題よこゝろにはきてうつくしきをいふ

一 萬葉には 舟のろを 棹とよみて 今棹ヲサシ 二棹マカチ 棹と云 八十棹ヤソカ

一 掉乃なかいもさをもよめり ひとり川とねと読乃たぐひなる時は櫓なり 知中とよめる

一 さ読乃そさしと書ていかゞ

一 うひち こゝち ひちりこと 皆同〳〵名なり

一 和名よと云ハ出されど 日本後記は 登勒野を泥濘野とかゝり俗よりとゝと濁りていふ

一 もゝの〳〵あく文章は 塗の字をぬるとよめる雨ふりて道のあしきを書ては上よりへるをいふ

一 きれひろをまさかりとよめり

一 そりかをを日本紀よりそこと云へり

一 水をことひとよめるは 主水司をもことひとよめる催馬楽より

一 そし景行紀は 冷水をさむきこゝろ

一 こゝもひさむとゝれる 赤淵を寒淵とよめるこれあれ

一 頻ろ 和名は振 袖にふる 是俗よりいふ方立てきてはかりとよめるあく今事さするにはこゝろ会のこゝろをと

和名もはのはまうとつきは彼なよなそ
韻乃字なれをかよそ〳〵くおこちち
そ其そのなもはは〳〵ちとそいか

一 こゑまこそるくく
一 うゝ狭 そらへ せれゝ そひら
一 ゑひ めゝ
一 催馬樂よりたりいつゝ世よいふら
一 頭ゝうへうら鵠 そひふ

乳母 ちゝも めのと 父ち かそ
兄ひよ おのうこ せうと 弟おと
其れそち やうて 拔ぬ〳〵 〳〵そ
ならとうこと母〳〵 あれり
神のやう狭を みもろとそいくく
一 うをを ありまほを
一 えのこほ〳〵をいぬるひぬ〳〵

一 くちらをいさるといふ和名抄を出されし
一 章句ゝさこそ ゝそよそんを
一 雲を 無限に家集よい君のわう〳〵
一 雪ををふれとよそを

招 まねくをく 集 あつまる つとふ
お面うち もゝしれ おのへ
みゝを さくらさ おろきみ まくら
おうふうめを きゝて きし ときし
ゐふ こゐ
さゝよ〳〵 すゝのえ 三のえひ
あをゝそま おそ〳〵
きはさ 秋のこを 古みを
ハ ふゑもろきふゑ ものとをとゐ
接ひてひ 濱藻 ゐのりそも
灼然 いちゝろ〳〵 いそちこなり

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

ちをこそ〳〵　又あつさ
大沢の池　唐沢の池あり　甲よ大沢川の名もち
更科山をまさかおはそてよ山ともふ
姿向山をまさかあれしの山ともふ
詮をぬりてもぬてもふ　但鐸の字をぬてもふこ
科か大る詮をいへはちひさきをいへぬ又され
きとも　延喜式　古語拾遺よあて
りちをまさかおはそてよ山ともふ
ふよあふし
うねるものさしとあり〳〵てもろ〳〵の名多り万葉ふ放
髪非をうねひをれともあれよ独寝よいとめさしある
ひけてをもちよりあをもろあとなりねてもに髪のみれ
よひく名つきもろとおはしきり
清みろうれて　えちまきをしきろとらふ
盥

山城川　日本紀　淀川ふ　山城女　万葉
こまと路　こまと鴎　こまとも
河内女　古今　大和ま　こまと人　いせ
ひつまもて　ひつまもとこ　あつま
あつまをそ　ひつまあをそ　ひつま
伊勢人　三十一字　三万葉　ひつかち
桓武朝人名　又堀川院乃後度百首詠之
尾張粗
拾遺　明衡　新撰楽記
駿河舞　甲斐哥
土佐日記
相模路　さくみね
以上二並万葉
武蔵鐙

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44
ガラス使用

伊勢 万葉 おもてり 六帖 ふもち
近江 万葉 古今 ちくさ人
並 万葉 信濃路 信濃野
小大君家集 陸奥山
万葉小田部 ここもなる
わらさ 万葉 日 廿 みこて 日 こて
拾遺 古備人
古文記 紀路 万葉 紀人
淡路嶋 伊予簾
詞花集恵慶 清少納言
万葉 筑紫路
土佐路 共 万葉 日よ 筑紫舟
拾遺 万葉 筑紫掬
宇治人 細代人
奈良路 万葉 以上二万葉
ゐすかとこ 日 なるやをとめ
古今 万葉 以上四万葉
飛羽山松 そよ川せち
宇治川浪 以上万葉
安太人 古今 万葉 佐保路
拾遺 三田姫 佐保姫
衾 万葉 雑波人 雑波女
雑波蓑笠
万葉 貫之 雑波
三滝蓑 日 有間蓑 日 明石蓑 日
古文記 獦人 日 特牛
さとら人 庵蓑 作良の人々
催馬楽
きゞ人 万葉 並 キ 蓑 笠 着 企 斧 キ

三嶋木綿　神楽哥

さそねちあらや舟　已上二万葉

八百萬いうほ　かりこもとそ　さそ祢

万葉かりもとそ　くとうい　陸奥よさふなあるかし又かりもとそ

滅をとめ

津守　網引　万葉　おそ山つら　一ク三室山　万葉志賀さき秋波

万葉　月如保治　稲目妻　日　杉浦舟　以上二葉万葉

木綿山雪　万葉　水莖　古今　四極山　白濱波

あをり柳

家乃きくに　ことと　ふみ　辨

家集　故内侍乃　かえ　ふみ

賀　ふみ

榮の一もとさくに万代をむすひ

哥　もろ　このむ　ふ

新拾遺集　第五秋下

名　おへ　花さへ　榮の一

哥　榮乃葉を　ふ

拾遺集　第十九物名

あなとて人もとき　ことと　花のにほひ

此哥新勅撰集　第十雑哥ニハ

續後撰集　第八冬部ニ　回歌院ニ

時　花なれと

尚侍　藤原朝臣

右ニ記スベシ

御返し
いつくとよみ玉ひ海の時もまもりそこれ
金葉集よ 神まつり月かげなかる夜半の空に
新勅撰よ 一もとの萩ふく風の夕されは名乃
こゑ小萩の露のしたをれ
春の苔よくあふよしもがな 後撰よ
神まつる袖をおくなねぎ事をかけしも我
又
はつ霜まなく人をとふらん 春風夜の苔
新古今よ
春の夜は苔の衣も打ぬれて
又
枕にたつるいとしたに君かいるみよ春の夜の苔
續千載に
つかさをこえしよりなの苔小ぬれ
貫之集よ
神まつる袖をおくなねぎ事をかけしも我
新古今
春の夜は苔のうき橋とたえして峯よりおつる
定家
伊勢集よ
春の夜の苔ふりつもれ小人待まて
金葉集ふ
ふりぬ神いまはなく法師の夜は
六帖第五
春の夜の苔(なごり)(苔)なからなしや人の上ふる雨ふらしも
西行法師山家集ふ
年ふれは春とへとしも秋夜

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

これらまく和名
五月ごろをもて行ふをいむよし
あり伊勢家集中務家集小大君集おほくよし利
いまおもふふるさとあり　天鼈女と
おほら衣もこりあり　天衣と　雨衣と　海士衣となり
いまの衣もの名なるよしあれど衣をみるに
猶なを注をもらるゝ雨衣なり　六帖才三法の歌なり　蚕衣と
よほの海よ　いまの衣神こと泣ぬる時をるさ
あま雲よふる川あり　天雲と
よみもなとつゝみもあまり　天雲となり
後撰よ
いまやうのもゝよ夜ふかくふる雨の神のこぬ涙なるやり
後拾遺ふ
あまそのかんべるをりの村雨よ
富士のふもとありこゝ本のりうもの拠ありく神うれく
ぬるよ近江のこゝ名のさして
秋こゝ本ゝ近江のこゝ名のさして
はるゝもとこゝ
後拾遺材木ゝ拾遺に
いろなみの色衣のこゝ名のさして
蓑衣よふる川あり　時衣の名といへり
もれる布とれを
をりはふるはもあり　丁の羽根ふるとよめるとあり
舟の棹よふる川あり　万葉よ二棹
名ゝらはをへく　櫂をいふ也
いまふる川あるとへくこゝ名を波人よそへて天をる
あまをいへとそれゝゝはあをといへて　天川ゐたるとあり
猶をいたし
きのふこゝ川のこゝろあるとそふ
おもきことを指ゐてその人よそ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

なる歟如
神代記は 栲縄 くなそといへる八寸
へ歟 紐おとなしてなそゐり 栲衾 まそ
啓これなるくふ本 名よて其本四
なる角〜万葉ふくるそうる紀令な
ふおる〜ねるを六帖十三ふ海よあまを
をはまそく載る又等ふ落乃三
みはとのこよんて古今集ふ小野篁朝臣乃陸奥国になり
さわくしある言

おもひきや 名なの経おおふへて あふ方のなそる紀いさをちんこふ
歌なそそもとは海人ハうつきそふ腰よ縄をなてうらうん
ありよ時ハ其縄をひゆるうやはさて舟よりいそてたくり
うなそをいふ歌る紀をいふをそ日本紀もあり万葉にも
あまさかるて
岩乃上に小栲ふさてこゑるにおたけてそかをまくらのあち

これハ日本紀にあり

又
言もなくそふてそみまほしきふふ山かな

又
大舟をあつみよいこ舟ふ紀あるこ

又
たけハなれるこ舟ハ其妹が磐ひ沈みぬる紀をつらん

又
されてふ忘草葉ゆでかれ〜さる詞
妹なまよふくを野辺〜ふて今ふ紀の中よそ日〜
有ゆる速し拳とふよおくふうよ〜
そてくるをとふいくるふ紀そうくふ
ふさりいうとさくく

くれのうてふふそあり 雲カ 旗ふと 蜘蛛ひとなり 荘家
等葉に

天乃ふそりとの又こゆるる雨のそこうきそ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

六帖第五　ひものうた

　人まろ

おくしものそうふたくまでも味ひおもひ
これはもいふにはあらねどもなれをみる時にそ
そひつれのみにかりんとうるみなくに　今の人

後拾遺集第四秋上　よみ人しらず

　新左京門

ふるさとをよそにみねの月ゆゑに
人ずてならぬ秋風ぞふく

　中納言文

秋ふかみいるひさしをとふ物ゆゑに
ゆふへよそのまきのとをたゝく

中務家集

　日くらしなきつる秋の掃部のなこ
これはのそれはすつぬるとふにをふ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

さえのこふかなしやうなれとそれハ言葉よそきめねらにてあれハ
まき雪よふぬるといえんとてをそうといそ
はくうもれよいぬへく

万葉才七ヨ

伊勢の海乃あまの朝な夕なに潜ちふ鰒玉乎
六帖ちわさの乃
六帖よりのまゝ乃そよ蜷三を載るよハ
ましへて万葉よ鰒玉とよめるものきふ
よんで山家集よも物こゑもとよめる
いかゝとさよちひちうへきまる
免さ鮑かとゝなしつる人ふらいちきを
移さ載るふゝみちのくもあこそとふ
ふみ読ふ日記よ申とをしのむ
上人高雄を生ふまふ時に
山寺ハ法師くさくていふそふ仏ハ
ふそふハかゝ念の名とそ申ふる

鶯ハ春の名の中にまをとうくふるれて愛食菓と
名付ふ乃
奥ハ深こゝの尾乃れを 鷦鷯とふ
鳥ハ人乃取かたきふ乃そをまれを
漆 雲津 鳶 乾 鯉 寝
鵜鷹 元鳥の大きなるを鵜とふ
鷲 ふくゝの乃ふ
鮒 ふハ字ハ書ふハ奥乃略ふ
鯰 ふとふをこゝハ字の書を
寺 母青色をまくくく共光のてふ
炊とふ拙く冥き塗をてふ乃ふ
仏 ふよ 勘駄を用釋ふハ浮屠とふ
をふへく多ふふれ貴人を本ふ寺
て日本記 古支紀ふよふくふ
神 かゝ かゝこの略とゝへふ社を日本記ふ

社やしろ　屋代や

称賞　日本紀に初のよを祈くことを祈よいのてねふをもの多人のよを神よいのてねふをもの多人のよを神よいのてねふをもの多人のよを神よいのてねふをもの多人のよを神

巫かんなぎ　神和し神をかこもるおのの名

太刀　こち　断なりそのところきれなれそ　片無といふ刃

刀　それ　そ反たるもの　鈍のそくなれそ　遠く人をうつもの

長刀　薙　鈍のそくまそ　遠く人をうつもの

蕪かぶら　頭圓くつりれを略して和名を白頭蚯蚓

をふくみをよれをよれをふかうみ頭槌鈍をかぶらの

つきといふこと　らハ伊字なく

笠かさ　童なとふ略　瘡もかさ　俗に疱乃

中よかさくちくさをかさといふ

水乃みなそ　おそ　かさよりそ

檐のき　屋のうちにのきてあれハふ刃号い

祖父　おほち　大父ち

祖母　おほ　大母ち

親　おや

曾祖父　ひおほち　ふたおほち　三代目の祖父をいふ

曾祖母　ひおほ　ふたおほ　三代目の祖母をいふ

を号ふよ陽つ刃心　万葉よいくへとふ陽のなをも童乃

こをもそれ純れそ幾童といふをいふ

通それ今一言ふてあ母ちといふ

父そ　親乃外女をいふ

母いろそ　おもとハ其恩を童それいろそは母ふそを

そうれてそくもをおふ心地観経ハ母を荘厳と

名つくと流ふまくもそ生物いろふ

ゆへなり石ふにふをふをふとふ

孫まこ　まこハ又てなふて　そこハひ母ちふをふて知へし

曾孫そこ　今そをふてふ孫乃れをふこと

末すゑ　者人乃り　年乃ふをふ人く

伯父　おぢ　小父

伯母　おば　小母

おのちをなようめてもいふ又ちゝふのえゝいふ

従父兄弟　いとこ

女子集いとこ同うそをいとこおばそくへ人のいふ姉

よたちちゝ弟妹いとこのよ新とそ

ざゝよふ糸子とよ心糸を引をいとこおばくへる

となれはそよふるとくそ弟妹いとこおばくへる

ゝれらこゝなれはいとこおばくへる

うまんいちをいとこともいとこおばくへる

とよそ実もそんをおばくへ其姉

ものへこれ親族の如にいとこおばくへる

甥　姪　をひ　めひ

兄弟のよい舟のとくゝるれとさゝらわ

漏たるまくとゝいふ異をおひとをひめひ

獣　けだもの　毛生て四肢あれ毛

介

木　き　むくいけとよすさまじきみとて

さまゝゝ木とる新なく

草　くさ　雑くさゝの如ゝ草人ゝ

人乃心ゝ

竹　たけ　二ゝよう十あまりうゝれ千

万葉に載よこゝの竹をかゝくゝ

亀　かめ　神異なるものなれを神とゝ

又十四東京に神をかめとゝ通ゝ萬葉

亀に例ゝうゝ

松　まつ　万葉にもあまた待（マヽ）よゝ

やまあゝく行事をまつの如に名多新ゝ

杉　すぎ　杉木ゝくきとよふ

花　はな　ゝれとふゝちをいへ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

額（ぬか）　ぬかいと云ふは虎狼の牙を以て物を
なぎ倒すをぬかと云ふ故に回額にて過を抜歯を和名にぬかと云ふ
めくむ　くらひつくむ　むさぼりくらふ事なり
かたらひよりてそこなふ
鯛（たい）　平なり形き美なれば祝ひ賀する席に
物ごとに用ゐる故に名付しなるべし
馬（うま）　美（うま）しき義なり名馬は日本紀に出たり
とんでそこなふ　涅槃経に馬は世の財なるが故に其肉を
くらふことをゆるす
牛（うし）　日本紀に大人を乗物をもつかさどれば是を
中央土畜に当る故に其用おほきを以て名とす
名を得る故に又うしと呼ぶと回額まで通ず
猫（ねこ）　鼠（ねずみ）を待（まつ）の略なり　鼠の形ねこに似て
ものをよく穴に潜む故に猫乃（ねこの）ごとしと云ふ

鳥（とり）　とりてかるる故に西域にてはとりと云ふ
猫（ねこ）　足小にして常に行歩をつゝしみ
事和ぐるが如し又うしと呼ぶ故二字を合せて
なでて和名とす　猫睛（びょうせい）　猫の目は
かりそめにもとぢたる事なくさるが如くなるを以て名とす
ますにつれて縦横になるを以て名とす
畑（はたけ）　是は焼畑（やきはた）を俗字を
畠（はたけ）　和名抄に火田（ひた）と云ふ
なでて和名とす　蚕蒭（さんすう）　蚕の食ふ草を

瓢箪をさゝえるさまにつくりもてゆくさま古事紀に正木かつらをまさきかづらとあり倭名抄に仙のつえあるといふかつらもあれかつらかあるをもてかくいふなるべし

又ひさごともむくべきさま又ゑさしとよむべきさまとをかねたるなり高野かとのゝごとくゝゝて瘤神天皇の御名をかけるをもて久しく今の桂川なども昔は葛川なりし葛野郡にうれをれりいまくゝより云さゝるのなめりとおぼしきふしもあるべくらんや等記紀は久堅の天の河原とかゝり天先哥には地のそこひかれ天に隈なきものゆゑ天長地久とふ字句は皆佳りてかゝる所に云さゝるをもて知べし

扨瓢箪は久堅の天より延喜式の鎮火祝詞は伊弉册尊黄泉より逃きたまふ立洋を四種のものゝ名を生のたまふ瓢あり四種は雷火をおほせもの異名なり瓢箪の天より降るをもて天吉箇を云さゝるゝ神のそしめるべき瓢箪の天より降るをもて云さゝるゝよしなり水急のたぎつまき瓢箪の形もて天のさちのまろかるべき瓢の形より似られいふ歟

○をよしなどはたくみの添上郡和珥野よりいでゝ用をなすもの多くは葛をよりて作り出して葛のよりものゝ名をもて云ふ歟

つくゝゝ其後は古支紀は應神天皇のよりも世のくだるまゝ加れるかつくゝゝ

挑 くく 捔拳 きくこぶし 拳 ちから 吉阿又 ちからなり 田をすきよりて今は農民

捧 ささく 指拳

掻 ささく 持 ささく 持拳

助 ささく 手助なり

水守 もり もとをもりくゝ指ありて田水をもるゝ

水雷と名付くるもおもしろし

蛍　螢　ひる　蜉蝣　とう　ヤ蜩　とうけら　の略気うつろふもよくうたるれはいふかれ

虻　あぶ　朽縄　くちなわ　縄の　なまこ　雨蛙　あまがえる　鳴く

卵　らん　貝子　かいこ　虱　しらみ　蚤　のみ　蚊　か　蠅　はえ　蜘蛛　くも　蟻　あり　蜂　はち　蝶　ちょう　蛾　が　蜻蛉　とんぼ　蚯蚓　みみず　蛇　へび　蛙　かえる　蝸牛　かたつむり　蜥蜴　とかげ　蛞蝓　なめくじ　蚕　かいこ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

水蘄

主治署之

阿倍照任述

本艸釈名　芥菜　別録　水英　本経　楚葵

諸本艸を按ずるに葉ちぢれ有り白色のもの一種高田小生するものよく佳也水中に生ずるものと赤色のものとあり李廷飛説よく人を害して食すべからずとよくさぐれば今諸民赤白並用て食菜に供ずといえども其毒よわきものをいうか別ち食芥哲口疼腹ごこ有是芥を食する法をしるさざるものや時珍いかり詩小雅采菽之篇盛蘭溝洫泉言采其芥云張伸景が説よ春秋二時龍精を帯て芥菜の中に入ル人誤て食之と

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

き小病よく時疹或は蛇行を嗜とし九竹を料
食さらく佳し洗生潔白よりて用べし

蕎　主治畧之

本艸綱目釈名蕎生艸　麥もの数種あり葉ふ苦蕎
似て畑地布てまきもの佳也本艸集解時珍説に大
蕎科葉皆大成ものと名なり荞薁ともいへり此説甚非
也荞薁葉初生蒲公英ふ似て葉九く
有て長く蕎ふ似るべくもあらず茎ふ紫赤ふ似
といへんが蕎及荞薁共ふ茎両種共ふ圓扁形ふ似て
大ふ異なり蕎乃茎ふ米粒より小ふして真茎三角ふ尖
り荞薁ふ大豆を二ふ割たるごとくふして真形うつ
く偏也主治も又蕎とふ格別かはらず

鼠麹艸　主治畧之

有名未用　鼠麹艸　東壁薬類塗家　佛耳艸
本艸釈名　米粉　綱目　鼠耳　別録　佛耳艸
法家　無心艸　又別録　香茅　拾遺　黄蒿
會編　茸母

時珍曰麹言其花黄如麹色又可和米粉食也鼠耳言其
葉形如鼠耳又有白毛蒙茸似之故以名之呼為茸母俗
耳則鼠耳之訛也今雉人呼為毛耳亦則香茅之茅似

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

當作毛按段成式酉陽雜俎蚍蜉酒卅鼠耳也名無心
卅豈蚍蜉含哭故有是名耶云々 卅二種有り本卅に
載る所は鼠麴ふ即鼠耳卅也和俗父子卅ふ又一種
菓大ニして鉛黛あり是ハ本卅ならず 和俗母子卅ふ兩種よ米粉に交へ餅と
ふ食ふ右兩卅民俗ふ五行ふ又牡蒿ふ五行と
覺へ人ふ多ふ父子餅(母カ)ふ文徳實録ふ是
たり今三月三日ふ餅ふ製ふて父ふ
卅にかゆるふいふ乃ふ
捷 時記ふ三月三日鼠麴ふ
龍古料と名付時ふ乳ふ壓ふ
ふ詩ふ作れり正倉院ふ鼠麴卅ふ
又本卅ふ寂室ふ米粉ふ
乃菓ふ入て記せり ふ米微帝
寂室ふ入て拵ふ是ふ服食
寂室ふ政ふ徽宗帝即位
十一年ふ年ふ父ふ朝ふ
列ふ座ふ新父ふ
三月三日餅ふ入ふ
繁縷 主治昌光
本卅釈名蘩縷 教蘩縷 滋卅 鵞腸菜

世俗よく知るまゝを委不記拾其外
雞腸艸といふ艸ハ萵苣菜花實繁縷と別物也
拾六藥縷鷄腸兩艸共ニ用ゆ平淋を治ス
子ハ後方にくわしくれハ再述いづれを用ても害なし
るべし雞腸艸ハ俗ニ鹿の舌ともなづく花葉
縷ハ莖小ニして蔓延家園之
黄瓜菜 主治暑毒
本艸釈名 黄花菜 和名土器菜一名仏ノ座
又考ニこれを訶久々々と知らるゝ也て是を尋る
るに十能事まるべし拾天和事中紀州初瀬

北前川ともなづけ其葉又出雲国赤江の産某
地両毉より傳授ていへ六七田平ともいへ仏
くさものニ種あり和名の菜ハいへ田平ともいへ仏
ま本艸生瓜菜也ニ前川菜ハいへ田平ともいへ仏本艸菜部ニ記
記ス黄花菜ニ両艸の差を改正ニ七種の田平子
ハ本艸ニ記ス黄瓜菜也釈名ニ黄花菜多識倭名抄
集ニ苦菜ニ記ス按ニ苦菜俗ニいふ苦苣(チサ)也拾
若苣之類ニて花有葉丸ク書白を丸ちさともいふます
葉細長ニて花ハ俗ニいふ山菊ニ似ル
仲時称是を鶏醤ニ似ルとて誠ニ大概ニ似ル

則ち艸也又赤ちゃというあり茶北は紫赤色也は三種ハ人家ニ植て常ニ食茶
まて本艸ニ若菜と出たるハ此俗そう称し艸と云
物也右三種ハ共ニ苦し花黄菊花
乃ごとし是ハ山野ニ生ずる小ニ三種有り一種ハ白莖と云ハ五
稀也ハ艸ニ大小二三種有皆白汁出知らずんバあるべからず
六種ニ接ぬ等を断時ハ皆苦菜疑名あり
識者よく弁ふべし本艸ニ梁陶弘景苦菜
とて又義熙ハ詩谷風をうたひて誰謂荼苦荼即異
名也ハ此詩ハ本意ハ一切ニ
なれハ必定苦菜也ハ俗ニ
くまり等といへる是若き艸あり奥羽ニ別ニ
き活称さるくらハ是則本艸山艸ハ部ニ出る處乃
若菜也本艸并ニ艸ハ甘艸と名ハ苦菜ニ出たり
ハ艸ハ詩三荼を同銘とする説
とくくらう又奥羽ニ云ひて氏俗共名を知菜ニ又茶字
菜或大茶ニ大いふ艸あり又本艸混艸苦菜又茶
艸あり是ハ和名をいとろるといふまい事
ハ形状ニ類ハ分別不是非をろべし

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

初生葉ハ本州濕州之部ニ於テ記シ而シテ其大三四尺ニ及ヒ白花ヲ開ク其花族ヲ成シ
州形大抵敗醤ニ似テ又男女高花ト云ヒ
州ニテ苗葉飢年ニ民ヲシテ飯ニ和シ
濁レリ湯ニ煮テ苦濁ヲ去ラシム用ユ甚苦キ
州ニテ苦菜ト云ヒ無名ノ雑草ニ可ルヘシ
叔右ノ田手子ハ蒲公英ノ小成似ヨリ生花葉ヲ赤ク
如ク黄花菜又ヨク相類ス州和名仏ノ
坐ヨクヨリテ人多ク是ヲ食ス
ル書工ノ画ルニ仏ノ皆蓮花ノ如ク

似ル草ヲ以テ人ノ男子ノ如ク記シ而シテ其初生黄
ツル蓮ニ似テ更ニ多ク疑ヲ為シテ一ニ是ヲ混ス
青葉ヲ以テ茶州ニ類州ニ黄花菅ト云ヒ
ニ似テ初レ黄成花ナレハ
右ノ如ク本州ニ繁多シテ一ニ是ヲ正スヘシ
ラス又田ヲ周憲王救荒本州ニ載スル所ノ仏ノ指甲
也ト云ヒ人有リ遂ニ仏指甲ハ本州石州部ニ
世一巻ニ所著ノ佛甲州也又或人救荒本州ニ風輪菜ト
ソノ是ヲ正スヘシ其書ニ
記花ハ淡紛紅花ニシテ其葉相對ヒヨリ

別卅也黄花菜ハ斜ニ附テ三ツ四ツ
肉ノ黄花ヲ開ク是夏ノ黄花菜也又本卅石卅之部ニ
所出景天紙名ハ慎火一名戒天一名救火一名接火一名護
火一名辟火ト云ヘルモノハ諸人ノ知ル所ナリ
七葉火ヲ傷ケハ葉ヨリ滅ルモノニ金瘡之血止或ハ
ものはもちて痛ヲ止ム筋緊急ニ
とゝら卅也又ハ卅ヨリ初生ルヲ
あり彼ヲ大小ノ両種ありト其形色書ヨリシテ
形小ニ卅百合ノ根ヲ煮ルヲ或ハ蓮花ノ
良ク〳〵き也是ヲ仏甲卅トス書タル書アレ

仏甲卅ヨリヲ仏甲卅ヲ葉細ニシテ馬歯莧ノ茎ノ
ヲ〻ク苗葉ヨリ右田平子又ハ岩蓮花ノ
ヨリ下ル又一種是ヨリ粗ニシテ岩ニ生ル大概ノ
有ル石石或ハ川原ノ土石有ヲ生ルヲ又矣草也
俗ヨリ呼テ贋石蓮花ト云彼ヲ色薄赤ニ葉ノ岩
蓮花ハ四五月ヨリ至テ莟ヲ出シ二三寸也多
ハ茎ハ無キ卅也秋ニ右慎火卅岩蓮花
贋岩蓮花仏甲卅ノ四種ハ蕚ニ
格別也是ヲ混シテ黄花菜ト和名ヨリ
ノ中ヨリ取遠ヲ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44
ガラス使用

菘

本艸一名白菜按菘菜凡品也本艸以菔菜茶三種有之今教種唯多蔓菁無蕃油菜之類者水田以作畝種水菜與白菜不分本邦以京菜稱之本艸集解時珍云揚州植不肥大葉下一本十餘行每行一百六拾目也十行共一千八百目餘字不可考三四百目也餘斗有之八二貫目內外有之一本邦ニハ土地乃宜きまゝ

又畦養培作乃祖細なるものを叶ふまゝぞ

茉蕗

芸治暑之

本艸釈名蔊菜一名雹突甫雅註紫花菘温菘土酥按乃ゝ也ハ俗乃ゝ知るおよそ四時よも食茉よりもたべやすくまた多く記ふ本艸形花實異有之ゆえ亦厚音そう武蔵よりぞ大根あり似ぬよりくす又春にとりへる季のあり清る大根又干大根ハ作ふ別種也やうよ伊尾ハの方ものをとふ所乃

名物也其外諸国より打ち
那状多ニ記ニ別成ニ有ニ
水蘄（スイキン）　セリ

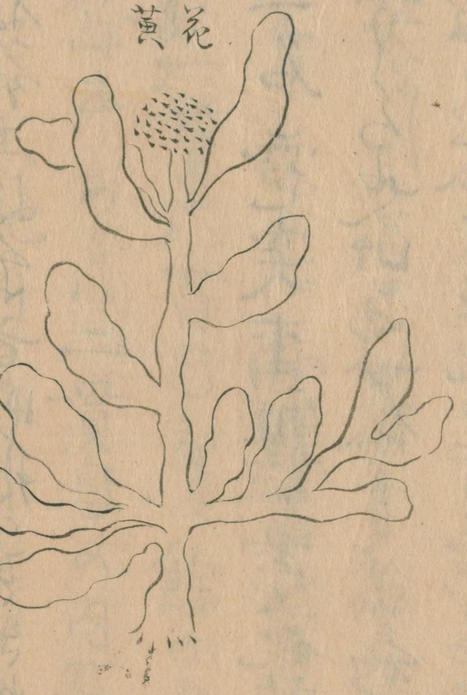
重圖ニ有ニ守寿私曰人知所也故略之

蓱（ヒョウ）　ウヅレ

重圖同断

鼠麹艸（コギク）　ハハコグサ

花
黄



繁縷（ハンル）　ハコベ

重圖略之

守寿私曰ハコベ二種アリ
葉ノ小ナルヲアカミバコベト云
葉ノ大ナルヲミドリバコベト云
葉ノ小サヲ用ユ

黄瓜菜　タネツケバナ
ナノハナ

花
黄

春アレ田ニ生ズル
艸ニ花モ葉モタンポヽニ
似タリ田舎ニテタビラコト云

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44
ガラス使用

菘 すゞな

守寿和名菜ハ今天王寺かぶ也

圖畧之

菜菔 すゝしろ

守寿和名大根の事とす

圖畧之

乾坤ノ内萬物陰陽ノ備ラさるハなし人ノ男女あり諸獣ノ牝牡あり諸鳥ノ雌雄あり草木ニ至まで皆之ニ陰あり實あり陽あり實あり陰ハ陽ヲ以テ實ヲ結ビ陽ハ陰ヲ以テ實ヲ結ぶ皆皂角捵柎大蛸子ノ如き是也又艸ノ禁花白菜あり京菜蒜薤有何者爲雄雌ありや数多ありや記すハ一ニハあらず鼠耳佛耳ハ雄也鼠耳ハ雌也鼠耳を誠ニ似たり小ふり仏耳も鼠耳十倍ノ如く仏耳ハ一可謂ものふり故鼠耳をちこし仏耳をそこなふて呼て可ならん形異るゆへ葉ノ白毛あるノなきも又実ノなるもの色ノ黒きも同ノ物ノ粉ノ和ノ餅を

苺毋艸 ちゝこ艸

補考　次才混雑

一土佐日記　紀貫之　七日よりぬきあをうなゐまつわかなをいとかしまくもとみのきろきうみみゆるかなほよりに人は家の池と名のみ水より鯉と鮒よりも川の海のことそもそも若菜も長柄よふるいはけくかふをいそもける別なり雑るとそ雑よはけうとそ

一源氏若菜上　尤大切殿の北の方なまいりのよ

河海抄十二種　若菜　薺　蘩蔞　水蓼　水雲菜　菘　蕪菁　芥　蕨　蕺　白河院よ　松恩菘欤　春りそくへ　大切所遠き小大根のよゆるよ　旧記よそゆ七種　蕺　繋縷　芹菁　御形　須々代　仏の座　うなゐ菜　あをな　あつもの云々

花鳥餘情　延長二年正月廿五日甲子　天子四十御賀上皇被献之紫震殿有其儀案女調

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

和若菜義と
供延云と

一公事根源 一条禅閤 内裏寛平事中始れるよし
よばれ日そとなむ寛平事中始れるよし
延喜十一年正月七日より後地より
又天暦四年二月廿九日女御 子
るし本部正にてさうり 中略 正月七日
七種の菜義と合せられ其人高麗もし又郭
をおく衛士ゐるとうたふ
又云七種の粥とは白穀大豆小豆栗とりかさ

さゝげ粳米 九条右丞相の門記よりうり

一四季物語 鴨長明 七くさのことは
うりをうすれて一よばれ病気
春ちゝのゆるさるゝをよ
ひらからよりなるとかを
みよるをこちく部乃好乃七
許れ野ちく一さ法ちかちそ
るつれおきせうち
よかそ下品
別本十七日 法ちそ
仏のざ川か

奉れる七くさの法あるものをおさめそぶらん
をそくこゝろとの作かはをそくこゝろとなれば
さるべき神仏きゝやれたまへるを

一拾效抄　洞院左府實照公

正月七日俗以七種菜作羹之
無禹病也　荊楚歲時記也　十二種若菜苗

菅蔴　蓼蘘荷　芝蓬　水蓼　水雲　菘
芹

七種菜　蓊　蘩縷　芹　菁　御形　須之宮
仏座

一塔婆抄　觀勝寺行善

正月七日七草ゆるものとぶら

七種なゝくさ七草とかきて七種とよめる
歌よ
芹なつな田子の浦浪打ちよせて誰を待ちえて
芹ぞつむなつなとよめる事は異説にて不一准或
但二月七日七草を献ずとよめる歌よ　年中行事
六日白馬節會又叙位事兵部省奏事
と計記て七草とよめる歌なし十五日ことに献ずと御
粥事詳し侍り又資隆卿八條流書をも篇中
抄註定也彼抄名抄也云ふもの事あらんや又
禁中の事年中行事よりほかに既廢務まで註せり

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44
ガラス使用

いそて當時の事漏我かりし不審事也下署

一夫木和哥抄 勝田越前守長清法名蓮照 六帖題名某撰當正朝公

篇中抄七日節會ありをこまて五日七種のありさまこ

君こそ七のあしたの七草よ粧ひみそへん家代の書

賀茂社百首哥 鎮和尚 いかこしなつかしこ

六帖信實朝臣七種の歌ふねまのかそへ

いろもかをいはぬ 百首哥 撰中納言経平卿

とわれ梅いかこ 津のかみのいくたの神もわかなつむ

或書摂津國生田の若菜毎年正月内裏へ献之

今も生田村ありまた中尾村より奉るといふ

堀川百首 師頼哥 撰人のこと

摘めたに生田のわかなつまれたる

一一書 紀貫之 俗云 主水式 立春 はる

一延喜式 十五日供御七種粥料 中宮亦同

米一討五升粟黍蓽子胡麻小豆各五升塩四升

一後撰正義 作者可考 古説曰そくといふ別名若菜の名也會供とも也正月七日白馬節會を奏進ずるを會供といふ

一世談問答 一禅 正月八日陽の月九日陰の月七日

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

少強の数ありて朝庭をさ
いわきて宴會をもよほすあり
一簠簋内傳　七草粥不動明王七把髪降伏悪
鬼
或書　六月七種菜白水無瀬殿献之七日御粥日
御堂所供之菜之御粥ひたうさ供之
或書　荊楚歲時記云
正月七日以七種菜為羹又按歲時記無七種之名品
國俗人日所用称七種者荇蓊鼠麹草一名佛耳
草倭名母子草或以為黄花菩高為邪蒿者非也

二種正月未生前　繁蔞　佛ノ座一名田平子
於蔞菁之類和俗曰菜在水田称水菜又曰
浮菜在陸田称畠菜於諸國称京菜
蘿蔔大根也　貝原篤信説　大和本草

右一帖　三枝守寿君より給写
安永二年乙巳正月初九日

或ハ
七くさ　さがて宮の時ゐに之事さゝめて始めもふいこくう大方もとう
　　ぶくてう事り物もの人あまさをまもりてをうみうやくなもあるをかもを
　　そぶしふそうるを
　　せうるつかふきをうたひらこころくこ
　　そそて七くさ

都に七秋有さん春秋りそぎをう
たひらこそそいし　かもめりぶくこさ　つゝ
まぐる　かふるふ　はびをうみりそくしろ　大こんこ
ひふみよいむなやこゝのとをゐんぞ
今ハ七くさのことを祝むすび幸神さ
七種とつとむるく

老乃春

閨屋とゐ里あり松あるに独のおの
時ハきりるき寸すきもそこてうこ
う親そちら呉てあるれてやちの
日とるく夜るく飽ぬおまよ之
それうちまわれて年月を送り
水もるて月ふるをいよ
るんるよそ。それと文のこちをそ
いさゝいそしらし世中のことをそ
添うそこのりをへ人ふそうゆ

75.6mm=40pixels

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

辰
44
13

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

辰
特別
44
14

三十輻

十四巻

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

三十輯巻之十四

古学先生和歌集

右一冊

南畝子輯

伊藤維楨

古学先生和歌集

春部

元日乙卯

一吹毎をうれしけふの日よ世を遍照の春

年内立春庚辰

去年こそ春をまちけれ年内に立春関

立春関

新玉のとしをかさねて年毎に春立関の水ぞすみける

源上野雪

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

簷梅

[illegible]

梅乃[illegible]

[illegible]

家[illegible] 簷梅乃[illegible]

[illegible]

正月の[illegible]

大[illegible]殿や[illegible]

家[illegible]歌春

春[illegible]

遠山似画圖

[illegible]

春曙

[illegible]

江山春望

[illegible]

春の歌[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

或人の山荘に花をたのみて
思ひてを折遣れるのつけよりやと
折もてもすさびうたてもの云ひ
遠里山花
よし野山こえの古い雲とうたふ雲ぞ
花人数花　和泉森の桜をうたふ
春雨をいとふ雨をまつ雨春雨
兼室花　桜をうたふ
うたてさくらの

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

落花

[illegible]

春雨

[illegible]

河上落花

[illegible]

落花

[illegible]

霧中の落花

[illegible]

名所落花

[illegible]

落花随風

[illegible]

落花満山

[illegible]

牡丹

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

花ぞとけぬ雪と云共降見えぬ人の心や梅

雑廻

久堅の雲井芝生玉垂て雑色花

歌合花

山吹の月色新あまた袖

梅薫風

日ぬるゝ七夕ふる星も生ぬ梅

月前花

春の夜の月と花との一時い千とせ

庭前の紅梅雪と高砂ともに

紅のそれとも梅のうつろひ今一しほの色香哉

紅梅は未開紅と中一種

薫衣陰春宵一刻直千金

月色もほの白い一時花千金

近江路や雪も花なき春の暮

家のそなた梅花杜若

垣ふかき梅花春の山を海とりけり

除夜

鄙吾

[illegible]

五月鄙吾

[illegible]

名取郡吾

[illegible]

蚊吾

[illegible]

閑産當

[illegible]

[illegible]

水辺當

[illegible]

江當

[illegible]

樹吾夜月

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

夏の夜堀の辺にすゞむ

ゆふれば涼しき風も吹そふて月を洒せる堀江のこゝち

夏の夜大雨洪解由出路の体をあらはして

暑き夜いくせ川なのおしまして東を待そむる

和歌の浦の茅葺くらき雲間より漏て人待顔

行水をよそに出ぬ待ぬ

六の浦の西より雲もち風涼しうふく

夕の比西方ちかうかゝる菴室

乃至西の雲そめて浪くれなゐ

立よれてすゞむ夕べのやどりかな

夕立

山東京伝

夕餉

夕まぐれこゝろぼそき軒の橋今ぞ名のみの夕立の雨

夕立雲

山のてもやそ日ぐけのうらうらにかゝるゆふ立

池五月雨

五月雨の袴着ながら水遊して今を名のみの夕立の雨

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

初秋風

七夕

萩露

萩風

萩雨

月未出山

更深ゆきふりつもるよのけしき

山家月

我ひとり戸ざす柴戸の庵かな

霧中月

霧晴て海ほのぼのとあけ行ころ

月前懐

数ならぬ身もうき時は打ながめ

雑月思昔

往昔の跡しのばるゝ荒野哉

月前志

いにしへもかくこそ有けめ秋の月

稲妻

うち出よ地かみなかの雲のうへ

深秋擣衣

独の女の今一声きぬ〳〵に

返事せぬ雲間の雁の便哉

星合

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

雲

なきの笆ゐうちにゆるく吟
ふ虫いとこぶ
ゑ
いときよらなのうへをとぶよに月
雲間月

白雲もなびきふれて秋をと雨
出雲
郷

秋ぞきく秋のあふれおちけれと虫の
八月十四日

此短策ハ
某在久城氏
家

吹うせや萩のてふしけのてまてよう乳
椅上集

とく集の白きうき雁とく月
隣家擣衣

よふけまていそちてとうとよう
八月十三夜陰

山のてよのふくなるまきまて
笠雨氏のふく秋のてふ
集月の時うくふ待

妹をや送り出でくるせいの浦の朝
月前擣衣
月さえて柳のもとの砧かな
百羽山もろ共寒し小夜衣
もく秋風の吉野山の山おろし心の急まつ暮
雑恋
うらうらと霞の浦の春の月知るや今なの空を
山家暮秋
志ぐれ降る籬の菊もうつろひて七ひろの山里
雪按重出

今よりもまつくさとそうつん時の秋より後の
月前傾
くまなきの東よりのぼるまでみるべき夜の
七夕
七夕らふ雲いと秋なきこの今宵空の空ふうん
暮秋
七ひろ七ふしの菊も朽果て霜葉も散敷く秋の
秋の暮
くれてそ冬ともおもふ秋の雨

初秋雲

秋ちかく風さへぬるる山路の雲

菊花

うつろふもきてとまらぬ雲のなみ

残暑

ゆきくれのうき夜もとまる秋の雨

九月十九日等持院の観楓

秋ふかくまきのうれやなほ雨雲

初秋風

月前萩

萩露を吹くや秋風よ雲の月

月を秋公

秋毎に月ぞ露なる萩が末

みやこ出月待ちくらす雲

ますら雄の雲ますらをの雲

秋雲

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

雪の朝如雪ふりつもれいとゞ松風の音

秋雪

秋雪ふりつゞく空の雲晴て稲葉を吹ぬく風ぞ冷まし

庭上秋雪

ふり雪のつゞくともなくうすくまで軒端の竹に秋は来にけり

秋雪

冬ながら秋の名もまだ小山田の雪をかりほに残るなりけり

竹雪

遠き山辺より雪ぞ降来る

未おもき竹のそよぎも雪ながら庭掃ほどをいふる雪かな

庭掃雪

風まぜに雪もふるふ寒空のよそに宮内村竹ぞそよぐ

埋火

土ぐらの一夜ばかりあたゝまり埋火ながら明て置ふり

晩春の表よりけふは雨ふるとをしらせ顔なる雀の一声

雨ながら雪ふる池水のあわの消ゆるをけさの一興

竹雪

ふり竹にふるともなしに軒ちかく雪のしら〳〵明るけさかな

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

山家冬景

[illegible]

冬花月

[illegible]

山雪

[illegible]

山家雪

[illegible]

山家雪朝

[illegible]

山家雪

[illegible]

十月のころ雪ふりて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山家冬望

文化十四年
丁丑孟春
十日久城氏
贈仁秋先生
真跡短策
一葉末文の
予の学恩真
跡校合

雛の節

中庸戒謹恐懼の心ばえ侍る

禊
慎

海道雑吟

和田の原舟路はるかなるきふねと
有るは舟場面ふたのまつ浦
なりけるにこそまつ浦にて
丹後ぶねのまつ待ちよる舟の
数おほいやとしたよる舟の
山陰をふねこぎまはるころ
角てもますみなとおもふ
寄道述懐

丹波なる生野の里ぶねふよ
中略
面てれよのさてもなほてよろこく
天正三年四月廿三日禁中
寄道花
寄道祝
寄道祝
第代を祝ひまつりて今よりいまさまん
寄道祝
秋毛乃人共心程てせる叶道のこと
小弥公以老毛八十八年祝のてまつ

朝毎さく我ゆく道の松合い新墾のうなゐ子ども

寄竹雑

風ふけばなびく笹葉の露もまだひぬうちにあひ見てしがな

冨士中納言

新あらたくきよらなる灯を三つ（カ）

毎夜ゑらび取竹もて

ゑらみまて毎夜ゑらびし竹ひとよ越みてもひ

毎夜ゑらび取竹もて

ゑらみまて毎夜ゑらびし竹ひとよ越みてもひ

行尊

水月ぞ流なる

ゑまでよき岸石影のそこまでも

通ふ心やよし山城なる

十市遠経

ゑくくる世やまん初瀬山きみが

定方朝臣

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

宝山堂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44　　ガラス使用

[illegible]

略

[illegible]

宮勝四天王院傳の名殿和歌 單立

春日野

雲ゐより匂ひ来にけり春日野の梅のみやこの春の初風

三輪山

[illegible]

[illegible]

龍田山

[illegible]

[illegible]

初瀬山

[illegible]

[illegible]

雜波浦

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

芦屋里

あしやさと夢のてふやちるらん

布引滝

ふるさとをめぐりも逢ぬ雪ながら

生田森

志ぐれ生田の森の下紅葉

和泉浦

ふく風も芦辺の浪もおまかせ

吹上濱

詩二帖

松浦山

風膳山

雨膳山

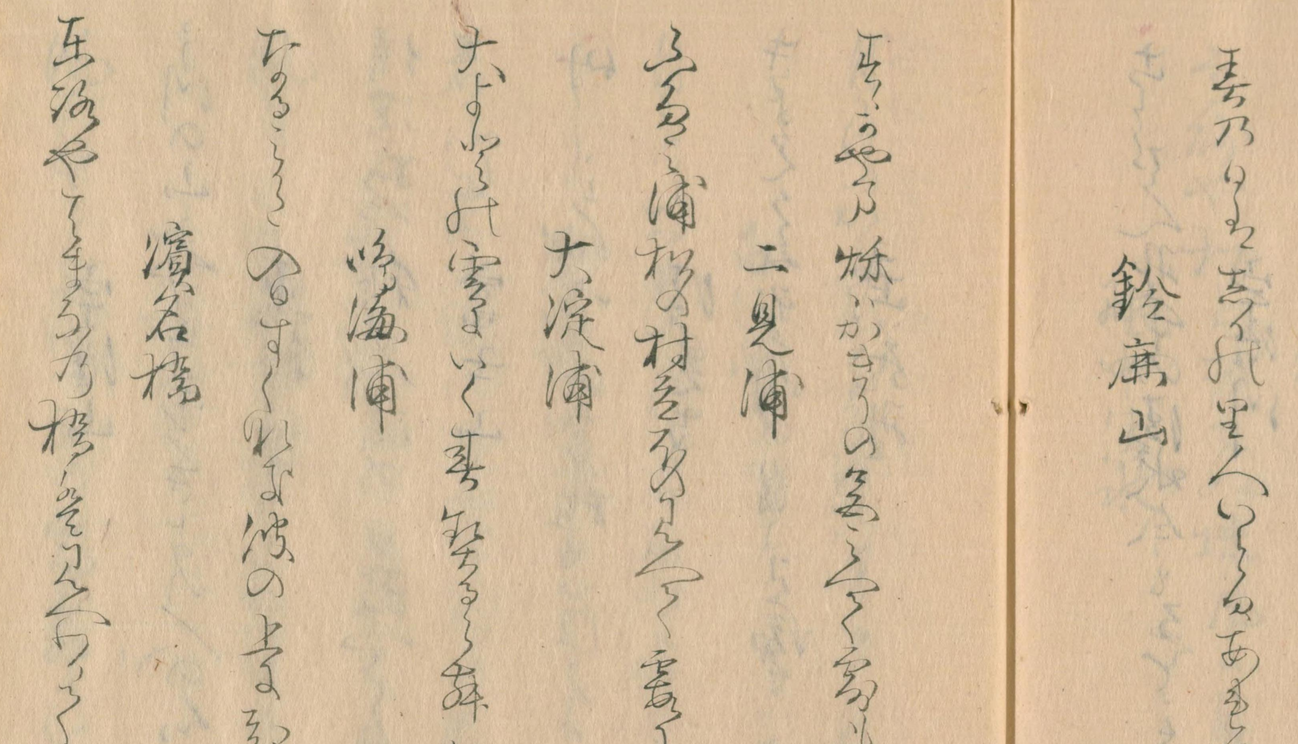
雨中清水

宇治川

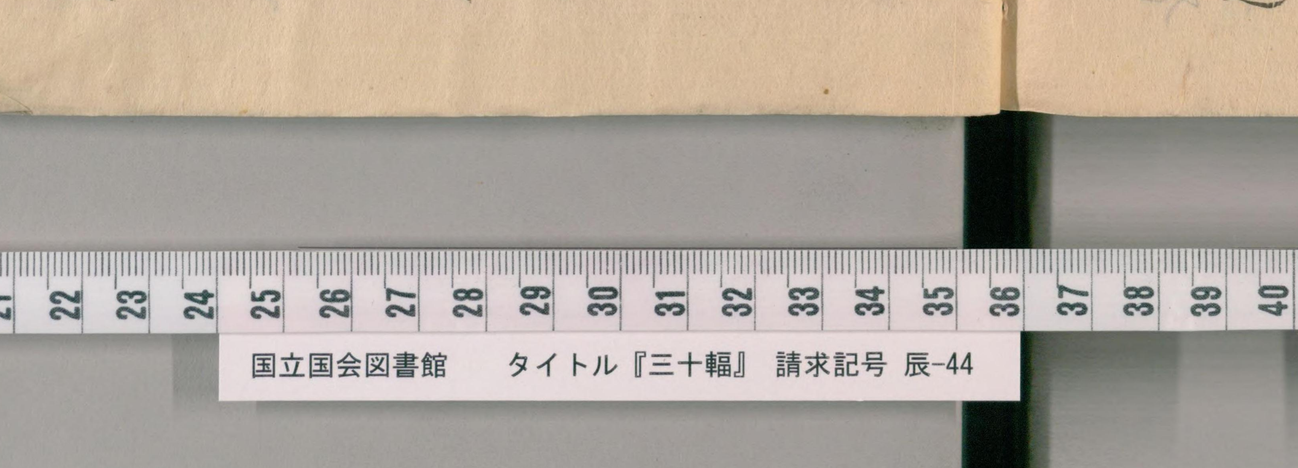
大井川

多賀

泉川



小倉山



志賀浦

鈴鹿山

二見浦

大淀浦

濱名橋

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

宇津山

うつの山こえてきよよの人のおくのてこの細道

東林寺

信濃路や秋も暮行く雲井科の行末

富士山

時しらぬ山の雪柏ふる雪も積る雪共芝山

清見寺

きよきよと多き勇の勇ましく波もうつ打

武蔵野

月うけのかるかやこそ秋深き霜の下葉の

白河関

勇ましくおもしろきかな西行法師の秋の歌

武蔵川

名にしおはゞいざ言問ん都鳥我思ふ人はありやなしやと

安達原

風もなく雨もなきのまゝ多屋ぬ安達ふ

五城壁

風もなく雨もなき夜の事なれば庵の柱も鳴ぬ

安積沼

夏の来る毎に植せるのめ子生るる沼

沼電浦

落つるやこゞ浦るる雲雨つ松

系芸庵花見鮫魚宴

海鮮を鮫つゝ人まゐれとものまゝ

海士楼主

月〳〵ノ夜更楼主や客の漫吟のうら

點六十四首 内活點七首 今改五十六首 傍字八首ノ点ヲ失スルナリ

古学先生和歌集畢

覃按六十三首点アリ一首点剝

手もすまに稽古をつゞく師傳ふるくて歌よむ

風雅の趣を悟るまでなりて花晨月夕おもふ

まゝ心の興ふかゝるまゝ詠ぬるまゝ

なるまゝの歌乃風情なかるべし

七首ニテ定ヲ失スルナリ

悟るまゝ詠ぬるまゝの歌ゟ意味ふかゝるまゝ

覃按此序文ノ意ハ初学ノ人ハ古学先生ノ歌ヲ

定の題ニ依テ詠ルヲ善ノ自然ト

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

辰
44
14

安永三年甲午冬十月幾望

南畝

元禄癸未の冬二月中旬

洛下老布衣 維楨題

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

辰
30
44

国立国会図書館　　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44